
幸福という名の堕りる階段

葉樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福という名の墮りる階段

【Nコード】

N8129B

【作者名】

葉樹

【あらすじ】

樹いつきが出会った悪魔のような美しい女、詩帆しほ。表を生きてきた樹にとって裏の世界を生きる詩帆はまぶしく尊敬すら思えた。彼女によって樹のとまっていた時間と心が動きだす。堕ちていく自分を感じながら樹は自分が人間だという事を実感していく。

プロローグ

暗闇で煙草に火をつける…。絶望のなかにほんの一瞬の幸せを見つけたような…。そんな気持ちになる…。そしてその希望の光は煙とともに消えていく。自分自身の手で…。吸えば吸うほど…。掴もうとすればするほどに…。

俺はその幸せを掴めるのか？…掴んで…。いいのか？それは本当に…。幸せと呼べるのだろうか…。掴めるかもわからないそれに躊躇しそれを想像する…。そうやって自分を慰め…。逃げ続けてきた。だけど…。もう逃げたくない。逃げてはいけない。俺が…。俺に正直になるために。もう…。俺に嘘をつきたくないんだ。たとえ幸せを掴めなくても…。

俺の元に降り立った悪魔のような美しい女。俺から幸せを奪い、俺に幸せな気持ちをくれた女…。俺が…。人間だと思い出させてくれた女…。

もし彼女が俺を選んでくれるなら堕ちるとこまで堕ちてしまってもいい。そう思った。たとえその先にあるのが…。幸せというものでなくても…。俺が俺になれるのなら…。

第一話

「えーと、『岐口 樹』さんでしたね。それでは後日追って連絡しますので。」白髪頭のスーツを着た男がいう。

「はい。よろしく願います。」俺はそう言っただけで軽く一礼すると部屋を出た。ビルを出て駅で切符を買いホームの端まで歩き喫煙所がないことに気付きながら当然のように煙草に火をつける。（とりあえず一段落か。）フーっと思と煙を吐き体の力を抜きゆっくり空を見上げる。

俺の名前は『岐口 樹』。

25才フリーター。

フリーターって言ってもいまどきの奴らみたいに就職するのがいやでチャラチャラ遊んでるようなのは違う。

これでも一応魚屋の職人だ。

ただ今勤めているところが正社員を募集していなかっただけ。

正社員じゃなくても技術は学べる。

そう思いいい条件の会社が見つかるまでそこで厄介になっていたわけだ。

技術も一通り覚え歳もそれなりに食っちゃった。

そろそろ本腰いれなきゃな。

そう思いはじめたんだ。

そう、今ちようどとある会社の面接を受けてきたとこだ。

慣れないスーツにネクタイに革靴。

緊張も手伝ってさすがに疲れた。

（そうだ、一応メールしとくか。

）俺は携帯電話をとりだし呼び慣れた名前の女性にメールを送る。

『今面接終わった。結構いい感じだったよ。』メールを送った女性の名は『藤崎 美香』付き合っただけで四年くらいになる彼女だ。歳は26才。幼さの中にどこか大人っぽさを感じさせる一般的には綺麗

で真面目で融通の利かない女性だ。ほどなくしてメールが返ってくる。『お疲れさま。でもあんまり安心しちゃだめだよ？手応えよくても受かるとはかぎらないからね？結果でるまでわかんないよ？』

「チッ」俺は軽く舌打ちをする。

そんな事はわかってる。

でもこんな時くらい素直に喜んでくれてもいいのに…。

美香はいつもそうだ。

絶対に俺を認めてはくれない。

俺をまわりと比較し批判する。

そんな彼女に俺は時折苛立ちを感じていた。

（あいつのために就職しようって思ったのもあったのに…なんだかなあ。

）

帰りの

電車の中、俺はボーツと外を眺めていた。

（こうしている間にもみんな一生懸命働いてるんだよな。

世の中には色んな仕事がある。

その中でなんで職人を選んだんだろうな。

）

意味のないことを考えていた。

そんな時俺の目にあるものが飛び込んできた。

まばゆいばかりのネオン。

中世の城を思わせるような外装のラブホテル。鶯谷だ。世界に光と影があるように人間社会にも表と裏がある。（社会の裏の仕事…。

そういえばこんな仕事もあったな。）過去風俗に行ったのは一二度程度。そんなにはまりはしなかった。（たまには行ってみるか。）

なんとなくそんな気持ちになった俺はおもむろに立ち上がり電車を降りた。

その開いた扉が…こんなに大きなものだったなんて…俺は知らなかったんだ…。

第二話

目の前に広がる赤や紫の光を放つ建物。人間の欲望やストレス、現代社会で生きる壮絶さ。そんなものを代弁しているかのように見えた。

若く挑発的で美しく着飾った女性。

その横を歩くハゲあがり腹の出た中年オヤジ。この中にいくつ本物の恋人達が存在しているのだろうか？おそらく大半は、かりそめの恋人を演じているのだろう。

そんな光景を横目に見ながら俺は以前見つけた携帯の風俗情報サイトを開く。（どこも似たり寄ったりだな。別にどこでもいいか。おつ、ここにするか。）

『初回のお客さま5000円割引！』その言葉に目を惹かれた俺は店の電話番号をクリックし店に電話をした。

「もしもし？」

想像より若く物腰の良さそうで感じのいい男の声。

「あ、えーと…利用したいんですが女の子を一人お願いしたいんですが。」（おいおい、一人って…二人も三人も呼ぶ気がよ

…。）あまりこういう受け答えに慣れていなかった俺は自分の口から出た言葉にアホらしさを感じすこし恥ずかしく思えた。

「はい、ありがとうございます。」

当店のご利用は初めてですか？」

「はい、

初めてですけど？」

「それでは5000円の割引になります。

どういった女性がよろしいでしょう？」

「うーん…。とりあえ

ずかわいい感じの人を。」

そういえば何も決めてなかった

事に気付いた俺は受け答えに困った。（あ！こんなじゃあ余ってるすんげえ女が来たりするんじゃない？あ！？）

「あ、あの、お薦めの子をお願いします！少しくらい待つてもいいんで！」

「大丈夫ですよ。すごいいい子がいるんですけど、今ちようど帰ってきたところなんです。この子なら間違いないですよ。」

「あ、じゃあその子をお願いします。」

「ありがとうございます。それではホテルに入られましたらお部屋からお電話ください。」

話がついたところで電話を切った俺は手ごろな値段のホテルを探し路地に入りこんだ。（おもえば一人でラブホに入るのなんて初めてだな。）少し躊躇しながら決めたホテルに足を踏み入れた。パネルの光っている部屋番号のボタン押し、受け付けでキーをもらいエレベーターに乗り込んだ。部屋番号を確認し鍵を開け中に入る。わりと普通の内装にちよつと肩透かしをくらいながらソファに腰を落とす。（あ、そういえば電話するんだったな。）「もしもし。」

「あ、さっき電話した岐口ですけど。〇〇ホテルの〇〇〇号室に入りました。」

「わかりました。」

それでは15分程で女の子が到着すると思いますので。

ありがとうございます。電話を切った俺はベット

に寝転んだ。ふと、美香の顔が頭によぎる。（風俗とはいえやつぱりやつちやいけない事だよな。まあ浮気するよりはずっといいか。）男の純粋な欲望を自分の意志弱さに肯定化し納得した俺は慣れない事をした緊張の疲れも手伝い少しうとうとし始めていた…。

…コンコン…

きたっ！

ちようど気持ち良くなってきたところで起こされた無性な苛立

ちを感じながらドアの前にたちノブに手をかける…。期待と不安を感じながら唾をのみ込みゆつくりとドアを開けた。

天使か…

悪魔か…。

第三話（前書き）

この章は多少性的描写が描かれています。気分を害されたら申し訳
ございません。

第三話

「こんばんわ。」

雪のような白い肌。肩につくくらいのストレートの黒髪。少しはにかんだ笑顔。やんわりとしたこそばゆい声色。

…彼女の外見を俺の頭が認識する前になぜかある単語が浮かびあがった。

…『黒い天使』…。

……

「大丈夫、ですか？」

「え？、ああ、もちろん。」

「よかった。失礼します。」そういつてドアを閉めた彼女は靴を脱ぎ部屋の隅にあった椅子に、俺はベットに腰かけた。

なんとなく頭がうまく働かない。なぜだろう？外見は確かにかなりのものだがそれでもまわりとそんなに飛び抜けているわけじゃないのに…なぜだろう？

「スーツって事は今日は仕事帰りですか？」

「え？ああ…いや、実は今日面接で。普段はスーツなんて着ないんです。」

「あ、そうなんですか！？どうだったんですか？うまくいきました？。」

「どうだろう？感じは悪くなかったと思うけど。」

「そっか、じゃあ受かるといいですね！」

そんなお互いをさぐるような話を少しの間繰り返す。俺は彼女をうまく直視できなかった。もともと女性とはなすのは苦手なほうだがこれは異常だ。そんな事を考えて意識が話にそっちのけになっていた俺は一気に心臓の鼓動を速めた。

彼女がベットにゆっくり近寄り俺の横に腰をおろした…そして…ゆつくりと俺の胸に顔を埋めた。

「ドキドキ…してるね？」その言葉に俺の心臓はさらに鼓動を速める。

「緊張してるの？」

「少し…。」

これは風俗特有の期待に胸を膨らませる緊張とは明らかに違う。無性に彼女を抱き締めたくなる。性欲とは別の違う気持ち。純粹に…純粹に彼女の体温を肌で感じたかった。

時間だけがすぎる。どのくらいこの状態でいたのだろう？痺れをきらしたのか、彼女は俺の顔を見上げにっこりとほほ笑み…そして唇を重ねてきた。

官能的すぎる口づけ。さっきまでまったく感じてなかった性欲が嘘のようにまるで全身をつつみこむように動きだす。彼女は僕の服を脱がし俺は彼女の服を脱がす。（なんて…綺麗…。）シミひとつない透き通るような肌。まるで…本当に人間なのかと思うほどに…。彼女は俺に体重をあずけ俺はそれに従った。

俺は彼女見続けた。見ていたかった。それくらい俺の上で動く彼女を美しく思えた。いやらしい気持ちではなくなにか…幸せな気分だった。

感じてしまったんだその刻に。俺は…この人となら…

堕ちていてもいいと…。

第四話

至福の時はあつという間に過ぎ俺たちはホテルを出た。

「受かるといいね。試験。」

「うん。まあどうなる事やらね。」

そういつて俺たちは別れた。振り返ると彼女は手を振ってくれていた。少し恥ずかしかったが俺もそれに応える。

まだ俺の頭はうまく働いていなかった。あの時俺は何を思っていた？
…堕ちてしまってもいい？彼女と一緒に？

何を考えている。彼女は俺の恋人じゃない。本当の名前もしらない
ただの風俗嬢だ。彼女の笑顔や会話だって、それが彼女の仕事なんだ。
第一俺には美香がいるじゃないか？…何を考えている…。俺は…
あの子に…

惚れたのか…？

たった小一時間、たいした話もせず体を合わせただけの関係…。ただの大人の遊びだろ？それなのに…俺は…そんな浅い男だったのか？
電車のなか、うなだれるように椅子に座っていた俺はおもむろに携帯を開いた。【新着メールあり】
『面接どうだった？
まだ帰ってこないの？』

俺は…返事を返せなかった。

なんでもないはず…なんの感情もないセックス。快樂を求めるだけの…。

そう自分に言い聞かせた。でも…俺は携帯を閉じた。

俺はいまどきの若い奴らが嫌いだ。

そういう俺もまだ若者に入るのだろうか。

とにかく嫌いだった。

なんにもできないくせにできた気になって口だけは達者で自分を主張する。

さも大げさに自分は幸せだ、不幸だと言う。

ほんとに幸せか？不幸か？口からでまかせだろう？ただ自分という人間を誇示したいだけ…。

夢に向かって頑張ってる？ほんとにそうか？それがほんとにおまえの夢か？そう思い聞かせてるだけじゃないのか？そもそも本当に努力しているの？軽がるしく愛の言葉をささやく。まるでラブソングのように。俺は世界で一番幸せだ、おまえだけだと。本当にそうなのか？じゃあなんでそんなに簡単に終わりを告げられる？なんでそんなにすぐ次の恋に踏み出せる？なぜそんなに無責任な言葉を発する？なぜそんな無責任な行動を？

薄っぺらい…薄っぺらい生き方だ。

俺はそんな奴らと一緒ににはなりたくなかった。だから俺は必要以上に自分を誇示しなかった。するのならば言葉ではなく態度と行動で示した。熱くならず冷静さを保ち続けた。おかげでまわりがよく見えるようになった。まわりからも一目置かれるようになった。言葉ではなく行動で示す事ができたからかもしれない。

だけど知らない間に俺は感情が欠落していたんだ。

何かをなりふりかまわず必死に追い掛ける事を。

何かを欲する事を…。

何かを…。

そう、気付いたんだよ…。ずっと恐かったんだ。何か大切なものを失う事に…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129b/>

幸福という名の墮りる階段

2010年10月28日02時57分発行